

「顔面ロック」

齋藤 瑠久

○ 登場人物

梨花（16） 見栄っ張り。

久美（16） 冷静。

奏（16）^{かなで} 感情的。

晴菜（16）^{はるな} おっとりしている。

放課後の教室。

机を挟んで、梨花と久美が座っている。

スマホをいじっている久美。

久美と視線を合わせないよう、そっぽを向いている梨花。
扉が開いて、奏と晴菜がやってくる。

久美「(奏と晴菜に気づいて) ねえ」

奏「なに？」

久美「聞いた？」

奏「聞いたって？」

久美「梨花から」

奏「なに。知らない」

久美「告白したんだって」

奏「え？ ……誰」

梨花「…」

久美「大輝先輩」

奏「……は？」

久美「(苦笑) 意味わかんないよね」

奏「(晴菜に) 聞いてた？」

晴菜「……聞いてない」

奏「え？ 話したんでしょ？」

晴菜「……話したっていうか」

奏「相談してたんだよね？」

晴菜「うん」

久美「え？ 相談してたって？」

奏「(梨花に) なんか、ないの？」

晴菜「(奏に) いいよ」

奏「よくないでしょ。全然」

晴菜「…」

奏「(晴菜に) え、わかんない？ 自分が馬鹿にされてんの」

久美「(梨花に) ……え」

奏「(梨花に) いつ送ったの？」

梨花「…」

奏「え、なんで答えないの？」

久美「……さっき、送ったって」

奏「返信は？」

久美「……来てないでしょ。いま部活だから」

奏「なんて、送ったの？」

梨花「……」

奏「梨花に、聞いてるんだけど」

梨花、バッグからスマホを取り出す。

画面が見えないよう伏せて、スマホを机に置く梨花。

奏「なにその態度」

晴菜「（止めようと）奏」

奏「見ていいってことだよね？」

奏、梨花のスマホを取る。

しかし、ロックがかかっていて開かない。

奏、顔認証しようと、スマホを梨花に向ける。

それを阻止しようと、目をつぶる梨花。

スマホの画面を見て、ロックが解除されていないのを確認する奏。

もう一度、スマホを梨花に向ける、奏。

奏「開けなよ」

梨花、目をつぶったまま。

奏「目、開けなよ」

久美「（苦笑）なにやってんの」

奏「もういい」

奏、梨花のスマホを机の上に投げる。

奏、帰ろうとする。

奏「（晴菜に）帰るよ」

晴菜「（梨花を見て）え。でも」

奏「（晴菜の腕を引っ張って）帰るよ！」

久美「梨花」

梨花「……なに？」

久美「いいの？ これで」

立ち止まる、奏と晴菜。

梨花、机のスマホを取って、バッグに入れる。

久美「理由あるなら言わないと」

梨花「（苦笑）理由？ ないけど」

奏「なにそれ」

奏、晴菜を引っ張って、再び帰ろうとする。

梨花「晴菜も、送ればいいじゃん」

立ち止まる、晴菜と奏。

梨花「さっさと言えば良いじゃん」

奏「（溜息）あのさ」

久美「おかしいでしょ。それは。だって、何も言わずに勝手に送ったんでしょ？」

梨花「そうだよ」

奏「謝らないの？」

梨花「だから、晴菜も送っていいって言ってんじゃん」

久美「それで、フェアになるって思ってる？」

梨花「（苦笑）フェアってなに？ 最初からそんなのなかったですよ」

晴菜「……わかった」

久美「（晴菜を見て）え？」

晴菜「私も送る」

奏「……なんで？」

晴菜、スマホを持って、

晴菜「梨花も送ったなら、私も送る」

奏、スマホを持った晴菜の腕を掴んで、

奏「駄目だよ」

晴菜「なんで？」

奏「自分で決めた？　ちゃんと、自分で決めた？」

晴菜「うん」

奏「嘘でしょ。梨花が送ってなかったら、違ったでしょ」

晴菜「うん。送ってなかった」

奏「なら、いいじゃん。送らなくて」

晴菜「ううん。送る」

奏「……なんで？」

奏、掴んでいた晴菜の手を離す。

奏、梨花を見る。

奏「なんで、晴菜が、晴菜のペースで、出来ないようにすんの？」

梨花「……」

晴菜「なら、送らないほうがいい？」

奏「……違う。晴菜が。だっつと」

晴菜「先輩部活忙しいから、邪魔にならないようにって考えてたよ」

奏「そうでしょ」

晴菜「でも、もし、梨花とそうになったらもう、チャンスないじゃん。だから、言う。梨花が、とかじゃなくて。言いたいから、送る。いま」

奏「……違うでしょ」

久美「奏」

久美、席を立って、奏に近づく。

晴菜、スマホを触っている。

奏「（久美に）え。だって、納得いかないでしょ」

久美「だけど、晴菜が決めたことだから」

奏「……そうだけど」

久美「応援しないと」

奏「……わかった」

久美「うん」

久美、席に戻ろうとする。

奏「なら、私も送る」

久美「え？」

久美、奏のもとに戻る。

奏、スマホを手に持って、

奏「私も、大輝先輩に送る」

久美「なんで？」

梨花「なに言ってるの」

奏「（梨花に）うるさい！」

久美「ごめん。ちゃんと説明して」

奏「だって、納得いかないから」

久美「説明になってないから」

奏「だから、晴菜は、大会終わるまで、先輩の。本当は待ってよ
うって思ってたけど」

久美「それほんとに送るの？」

奏「送る。だって、梨花のせいだから」

久美「うん。でも、意味わかんないよ。先輩からしたら。知らない
いんだから。……え、知らないよね？」

奏「……そっか」

久美「うん。やめて。言われた先輩だって困るし」

奏「でも、なんか送る」

久美「なんかかってなに？」

奏「だって、晴菜が頑張ってるのに」

久美「関係ないでしょ？」

奏、スマホを触り始める。

久美「……え。晴菜はいいの？」

晴菜、スマホから顔を上げて、

晴菜「ん？」

久美「聞いてた？」

奏「私も、応援メッセージ送りたいって話」

晴菜「奏も？」

久美「（苦笑）聞くよね」

晴菜「いいよ」

久美「いいんだ」

奏「（顔を上げて、久美に）え。なんて書く？」

久美「だから、言ってんじゃん」

晴菜「よし」

奏、久美と相談をしながら、先輩に送る文面を考えている。

晴菜、梨花と対面の席に座る。

晴菜「送った」

晴菜、画面が見えないよう伏せて、スマホを置く。

晴菜「本当に、送った？」

梨花「……え？」

晴菜「最初は（スマホを触って）こうやって、画面が見えないようにして置くの、返信見るのが怖いからかなって、思ってたけど。梨花、いちいちバッグにしまうから」

梨花「違うように見える？」

晴菜「……うん。怖いっていうか、隠してるみたいだから。怖かったら（スマホ触って）、怖いから、こうやって近くにないと落ち着かないし。いま」

梨花「……（苦笑）そうだよね」

奏のスマホが鳴る。

奏「(スマホを見て) ……え？」

久美「なに？」

奏「(久美にスマホ見せて)先輩から。梨花から何も来てないって来たんだけど」

奏と久美、梨花を見る。

晴菜、スマホの画面を梨花に向ける。

梨花「…なに？」

晴菜「開かないかなーって」

梨花「(苦笑) え？」

晴菜「顔認証」

梨花「…顔面違う」

晴菜「うん。でも、顔違うだけでしょ」

梨花「(笑う) 続ける？ これ」

晴菜「(笑う) うん。開けてくれるまで」

梨花「…ごめん」

晴菜、スマホを机に置く。

梨花「…ごめん。好きになっちゃった」

晴菜「…うん」

梨花「晴菜から相談されて。先輩と話す回数増えて。…でも、先輩、晴菜の話しかしないから」

晴菜「え？」

梨花「…えって、なに？」

晴菜「…だって」

梨花「うん。そうだよ。言わなかったよ。でも、晴菜だってわかってたでしょ。先輩、晴菜のことしか見てないじゃん」

晴菜「そう、かな？」

梨花「そうだよ！なんでわかんないの？」

晴菜「…」

梨花「晴菜は良いよね。かわいいから。黙ってればいいんだから」

バッグを持って、立ち去ろうとする梨花。

久美「それは違うでしょ」

梨花、振り返って、久美を見て、

梨花「私が、一番話してたんだよ！先輩と。なのに、晴菜は言わないから。いつまでも、私に相談するだけで」

久美「だったら、なんで嘘ついたの？」

梨花「だって、終わりに出来るでしょ。私が告白したって言えば、どうせ晴菜も言うんだから。いつも自分からは何もしないで、待ってるだけなんだから」

久美「梨花だって、そうでしょ」

梨花「（苦笑）え？」

久美「告白もしてないし、晴菜にも言ってなかったじゃん」

梨花「言ったでしょ」

久美「晴菜が、聞いてくれたからね」

梨花「じゃあ、なに。私も好きなんだけどーって言えばよかったの？」

久美「そう」

梨花「（苦笑）本気で言ってる？」

久美「言ってる」

梨花、三人の顔を見て、

梨花「……え、私だけが悪いのかな？」

久美「そういう話じゃないでしょ」

梨花「じゃあ、なんの話なの？」

久美「悪いとかじゃなくて」

梨花「責めてるじゃん」

久美「違うよ」

梨花「ずっと責めてるじゃん！」

久美「……」

梨花「私が、いまどんな気持ちで話してるか、考えたことある？
……考えてよ」

奏のスマホが鳴る。

奏「（スマホを見て）……ごめん。私が余計なラインしたから、先輩、梨花のこと、なんとなく気づいたかも」

梨花「……いいよ。私が嘘ついたのが、いけないんだし」

梨花のスマホが鳴る。

梨花、バッグから、スマホを取り出して、

梨花「（スマホを見る）……」

久美「先輩から？」

梨花「でもいい」

梨花、スマホをバッグにしまおうとする。

久美、それをとめて、

久美「駄目だよ。電話でしょ」

梨花「いい」

晴菜「出てよ」

梨花「なんで、晴菜が言うの？」

晴菜「私が言わないと、出ないでしょ」

梨花「じゃあ、なんて言われるの？先輩から」

晴菜「知らない」

梨花「振られるんだよ」

晴菜「私だって思った。だから今まで出来なかったんだよ」

梨花「だから？」

晴菜「でも、梨花は違うでしょ？」

梨花「……え？」

晴菜「私のこと考えてくれたから、出来なかったんでしょ？」

梨花「違うよ」

晴菜「私がいたから、嘘ついただけなんだよ」
梨花「違う」

晴菜「違わない！」

晴菜、席を立て、梨花のそばに行く。

晴菜「考えてるから、梨花のこと」

晴菜、スマホを持つ梨花の手を取って、

晴菜「考え続けるから、出てよ」

梨花「……いいの？」

晴菜「いいよ」

晴菜、梨花から手を離す。

梨花、先輩からの電話に出る。

久美、梨花のバッグが邪魔なことに気づいて、代わりに持ってあげる。

梨花、スマホを耳に当てる。

梨花、久美と晴菜と奏の顔を見ながら、

梨花「……ごめん。ありがとう」